

Title	文化哲学としての美の哲学 : ヴィルヘルム・パーペートの「美学史」研究
Author(s)	立野, 良介
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43320
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	立野良介
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第16707号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	文化哲学としての美の哲学—ヴィルヘルム・パーペートの「美学史」研究—
論文審査委員	(主査) 教授 上倉 庸敬 (副査) 教授 神林 恒道 教授 森谷 宇一 助教授 藤田 治彦

論文内容の要旨

本論文は、現代ドイツの美学者ヴィルヘルム・パーペート Wilhelm Perpeet (1915～) の説く「文化哲学」に立脚して、古典古代から問題でありつづけている「美」の哲学的意味を探求しようとしたものである。体裁は、注もふくめてA4判115ページ、1ページ36行で1行は40文字、400字詰原稿用紙に換算してほぼ415枚である。

「第1部 文化哲学としての美の哲学」は3章に分かたれ、第1章でパーペートの学問の軌跡がたどられ、第2章でパーペートのいう「文化哲学」の内容が分析され、第3章でパーペートの美学史研究が「美の現象学」として規定される。

「第1部」では次のように議論が展開する。パーペートは、人間学系の哲学者エーリッヒ・ロータッカー Erich Rothacker (1888～1965) から深い影響を受けて、あらゆる人間の文化活動を、人間の創造的意識にもとづき探求した。すなわち、無意識的にわれわれがそのうちにある、文化活動の最終的根拠たる意味未決定な「現実 Wirklichkeit」を意味づけるという意識活動から、人間の多様な文化活動を理解しようとした。そこでは哲学もまた、現実自体を理解しようとする文化活動として扱われる。美が哲学的課題とされたのも、意味未決定な現実への問題意識があらわれたものと理解できよう。他の人間が現実から獲得する様々な性質のうちで、美のもつ性質は、それが視覚的な光輝として、無目的に現出し、心情を暖かくして、他者との幸福な友好的関係をつくりだすことのうちに認められる。ところが、美は視覚的現象として最終的に規定できない現実である。それゆえ、歴史的に美を考察することがそのまま、美のもつ問題の拡がりを理解することになる。パーペートにとって美学史研究は必然的に「美の現象学」とならざるをえない。

「第2部 『美学』の3つの時代」も3章に分かたれ、それぞれにおいて古代美学、中世美学、ルネサンス美学が追尋されて、人間的観点から扱われた美の問題が「自然美学」の誕生をうながし、ルネサンスにいたって「芸術美」の発見へと歩みを進めていった、その必然的なプロセスが跡づけられる。論の展開にあたっては、パーペートの美学史研究がたえず詳細に参照されている。

古代では最初、美は神話的に把握されていたが、哲学の登場とともに美の根拠が問題にされはじめる。そのとき自然は人間にとって近づきえないヌミノゼ的性格を帯びていたため、美の根拠も人間の側からのみ考察されることになる。ところが、中世では、キリスト教の信仰が自然を神の被造物であると解していたため、自然は脱ヌミノゼ化され、自然美もまた人間の姿勢とは無関係に理解されるようになった。自然美を同じように光輝として把握しても、

古代と中世では、その光輝に対する方向が違っていたのである。ルネサンス、芸術家たちは人間や創造神ではなく、可視的現象自体のうちで真の現実を理解しようとした。「芸術美」の誕生である。あらたな美の登場とともに、「美」ではなく「芸術」が次第に哲学の課題とされるようになった。

「第3部 まとめ」において、「美」の人間学的な意味があらためて追求される。3つの時代は、それぞれ現実に対するドグマ的な姿勢をもつことで美を基礎づけていた。だが、現実に向かい合って、自身の幸福を他者と共有しようとしている点で、共通した性格を認めることができよう。その共通性のゆえに、美は人間にとって変わらぬ重要性をもつと、本論文は結論づける。

論文審査の結果の要旨

人間が美について考え出して以来の思想を総ざらえしようという、壮大なテーマをあつかって、単なる事象の紹介ないし羅列に堕さなかった理由は、ひとえに論者のモチベーションの強さに求められるだろう。論者が地道な美学史の研究を長いあいだ持続して到達した疑問は、いずれも首尾一貫して見える美学の教説が次々とひっくり返されては新たに打ち立てられるのは、なぜかというものであった。その疑問に答えぬうちは、自分なりの視点によって美学研究を続けることなぞ思いもよらぬという姿勢が論者にはある。その答えが本論文であった。

本論文を支える独自の柱は二つ、ある。一つは、美学史はそれ自体、美についての一貫した論究になっているのではないかという論者の考えであり、いま一つは、パーペートの美学史は、ドグマの多様性それ自体に意義をみとめる同じパーペートの芸術哲学がもとになっているのではないかという論者の着眼である。後者に関するパーペート芸術哲学の研究は、すでに論者自身によって雑誌『美学』に掲載されている。こうした独自の見通しに立って本論文は、一貫した視点から「美学史」自体を論じて、美のもつ「人間の浄福」という問題性を洗い出し、新鮮な美学史をうちたてたといえる。

当然のことながら本論文では、パーペートの美学研究が縦横に、自在に参照され、ときによって依存度が高すぎるように思われるところもないではないが、それ以上に論旨の独創が輝いている。本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。